

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第43回 第10.3.4節～第10.3.7.2節

2019年10月1日

小田 勝

「10.3.4 形容動詞語尾の変形」の298頁用例(1)であるが、大系『枕草子』の第61段(102頁)にも、「那智の滝は、熊野にありと聞くがあはれなるなり。」の例がみえるので一応記しておく(本書で底本としている新大系では「あはれなり」になっている(58段73頁))。次例は、「げ-なし」の間に副助詞・係助詞の介入した例である。

- ・み入りてともにも帰りげもなきを(枕71)

「-げあり」の形もある。

- ・少しゆかしげあることをまぜてこそ侍らめ。(源・少女)

299頁「10.3.5 形容動詞の音便」。次例は、形容動詞連体形語尾の「-る」が脱落したものと思われる。

- ・「内裏の景気見て参れ」とて、「これより寄するを待ちけるや、それより寄せらるるげなか」と伺はせられければ(保元)

- ・奴は異な者かな。(保元・金刀比羅本)

同頁「10.3.6 形容詞・形容動詞両形をもつ語」。語例としては、ほかに「おろかし／おろかなり」などがあるのだが、「うたてし／うたてなり」以下、用例(3)までは、「形容詞語幹に「なり」を付けることで、形容動詞形を派生する。」とまとめるべきであった。次例なども参照。

- ・つき草、うつろひやすなるこそうたてあれ。(枕63)

300頁「10.3.7.1 -げなり」では、用例(1)～(3)の類例、

- ・[夕霧ハ]「……」など[帝ヲ] そしらはしげにのたまひて(源・宿木)
- ・清盛、「……」と中々しげに(=モットモラシク)のたまひける。(平治・金刀比羅本)
- ・当時まことに無勢げなり。(愚管抄)

用例(11)～(13)の類例を追加する。

- ・「あな、童げや」と笑ふ(落窪)〈語幹用法〉

用例(15)(16)の上の説明文「動詞に付いた例」は、「動詞連用形に付いた例」とする。類例、

・人のおはしまし通ふやうにこそ聞こしめしげなれ。(和泉日記)

中世には、活用語の連体形に付いた例もみえる。

・この女時々は見返りなどすれども、我が供にくちなは蛇のあるとも知らぬげなり。(宇治4-5)

301頁「10.3.7.2 ーらなり」でも、類例を1例追加しておく。

・山里もまれらなりけりほととぎす待てども鳴かぬ声を聞くかな(中務集)

「10.3.7.1 ーげなり」、「10.3.7.2 ーらなり」と展開したので、この後に、次のような節も立てておこうか(こんなに分量を取る必要はないかもしれない)。

10.3.7.2' ー顔なり(新設)

「-顔なり」は、動詞の連用形、形容詞の語幹、その他種々の語に付いて、いかにもそのような表情やようすをしている意を表す。

- (1) いと用意あり顔にしづめたるさまぞことなるを(源・若菜下)
 - (2) おのがじし恨めしきをりをり、待ち顔ならむ夕暮れなどのこそ、見所はあらめ。(源・帚木)
 - (3) 草むらの虫の声々もよほし顔なるも、いと立ち離れにくき草のもとなり。(源・桐壺)
 - (4) をり知り顔なる時雨うちそそきて(源・葵)
 - (5) 掘り出して頸を取りて、いみじ顔に(=得意顔デ)もて参りて(愚管抄)
 - (6) すべて、心に知れらむことをも知らず顔にもてなし(源・帚木)
 - (7) なほびと直人の上達部などまでなり上り、我は顔にて家の内を飾り(源・帚木)
 - (8) 雨風に荒れのみまさる野寺には灯顔に(=マルデ灯デアルカノヨウニ)螢飛びかふ(堀河百首)
 - (9) なほ有明の月影を 待つこと顔に(=待ツトイウソブリデ)ながめても(新勅撰1342)
 - (10) あまりうちつけにとどまりて、またの御言の葉を待ち参らせ顔ならむも、思ふところ(=思慮)なきにもなりぬべし。(とはずがたり)
- ◆「-顔」という名詞としても用いられる。
- ・用意せむもわづらはしければ、知らず顔をつくる。(源・葵)
-